

『教行証文類』における『涅槃經』 『華嚴經』連引について

吉 田 宗 男

親鸞の師である源空によって『大無量寿經』『觀無量寿經』

『阿彌陀經』の浄土三部經が浄土宗における正依の經典として位置づけられたことは、彼の著書である『選択集』の「二門章」などから明確に窺えるところである。師の遺志を受け継いだ親鸞も『大無量寿經』を三經の要として位置づけているが、右の三經を浄土の三部經としていることには変わりはない。ただここで問題となるのは親鸞の著書を見ていったとき、この浄土三部經と並んで重要な位置を占めている經があるということである。それが『涅槃經』と『華嚴經』である。單純に經文の引用回数を見ても『涅槃經』は『大無量寿經』に次ぐ引用回数を誇っているし、『華嚴經』についても『大無量寿經』の異訳である『無量寿如来会』を置くとしたら、やはり、他の經典よりも引用回数が多い。そういった中でこの二經を見ていったとき、親鸞独自の用法が見られる。それが『涅槃經』『華嚴經』の連引なのである。

『教行証文類』において『涅槃經』『華嚴經』の連引は都合三カ所見ることが出来る。その一つ目が「行卷」の一乗釈、二つ目が「信卷」第二問答の信樂釈、三つ目が「化身土卷」の真門釈・二十願の勸信經文証である。この三カ所における連引は、普通の場合の成道から涅槃といったものとは異なり、涅槃から成道といった形をとっている。江戸宗学において、古来多くは『華嚴經』を智慧門、『涅槃經』を慈悲門と見て、その上で「浄土門は慈悲門の教」という大前提から『涅槃經』がまず先にくるものとしている。江戸期の講録等を見ても、それ以上の解釈が成されていないためこの説の詳細はつかみかねるが、『華嚴經』『涅槃經』を智慧門・慈悲門にわりあて、「浄土門は慈悲門の教」ということで、『涅槃經』『華嚴經』の順序を説明するには余りにも短絡的すぎるように思う。親鸞が『教行証文類』において三ヶ所も『涅槃經』『華嚴經』というこの順序で連引しているということは、

この順序で、一つの思想体系が成されていることが頷けると
思う。それを見ていくために『涅槃經』と『華嚴經』が有し
ている独自性をおさえなければならぬ。

『涅槃經』は「一切衆生悉有仏性」を説き、そこから如来
の寿命の永遠常住であることをあらわすものと見ることがで
き、特にそれは一乗思想の根拠となるものである。『華嚴經』
は如来自性の法界を背景として、普賢菩薩の行願を説き、そ
れは大乗の精神を顯すものと見ることができる。この二經で
釈迦一代の教説を顯していることはもちろんであるが、さら
に、仏道こそ唯一にして普遍の法であることを開顯するもの
であるといえよう。

「行巻」のこの箇所では「行巻」の一要義であり、一乗海
を重釈しているところで、一乗釈・海釈・一乗の機教の三項
に分かれているうちの第一項にあたる。この一乗の義を証誠
するために『涅槃經』と『華嚴經』の二經の文を引いてきて
いる。この二經の引文については幾つかの疑問が提起され
る。その第一は存覚の『六要鈔』に見られるように、この二
經には阿弥陀如来の功德を説いているわけではないのに、な
ぜこの二經を引いてきているのかということである。その解
答として存覚は『涅槃經』『華嚴經』という一代経文、特に
ここでは『涅槃經』には隠顯があり、そこに阿弥陀仏の凡小
救済の利生が説かれているとしている。このことから『涅槃

經』に説かれている一闍提成仏などはまさに阿弥陀仏の凡小
救済の利生と見ることができのではなからうか。救われざ
る者の救済、これこそが阿弥陀仏の大慈悲とよぶに相應し
い。そういった意味から考えると、この一乗釈の直ぐ後にく
る経文証は何等疑うところはなく、表面的には阿弥陀仏の功
徳、あるいは念仏のことには直接に触れていないが、その深
意は念仏一乗の理を顯し、淨土一実の義を明かして、清閑一
道の利を説いていると見ることができであらう。さらに存
覚は『六要鈔』で、阿弥陀仏の妙果は無上涅槃であり、念仏
はすなわち涅槃の門であるから、涅槃の誠説は阿弥陀仏の利
生を保持しないはずがないとしている。第二は、この箇所は
一乗釈でありながら、なぜにその経文証として『法華經』を
使わなかったのかということである。ここでの大きな焦点と
なるのが一闍提成仏ということであらう。一乗釈の『涅槃
經』引文の四文はそれぞれ「内道外道の対応」「信順不信順
の対応」「世間出世間の対応」「一乗多乗の対応」といった形
で一乗をおさえており、特にこの一乗は『涅槃經』において
は「一切衆生悉有仏性」ということでおさえられている。一
切衆生が往生成仏するには、如来の本願力によることはいう
までもない。つまり、五機類はみな同一に阿弥陀仏の本願に
乗託されるわけであるが、このすべてが本願力に乗ずるとい
うところに一乗のいわれがでてくるのである。さらにいうと

すべての機類がみな同じ菩提の妙果を証し、この証果が同一であるというところに一乗の意味が色濃く顯れてくるのである。その範疇は、当然、『法華經』で問題としている三乘よりも広がっているはずであろう。そしてそれに続いて『華嚴經』が引文されるのであるが、この『華嚴經』の引文は『涅槃經』のように対応関係で一乗をおさえるのではなく、阿弥陀仏が名号の一法一道によって衆生を救済するのだということと、一切の諸仏が阿弥陀仏の名号の一法を念じて平等の証果を得るということといったものであり、明らかにおさえたの形態が異なっていることが分かる。

「信巻」の信樂釈においても『涅槃經』と『華嚴經』の形態の異なりが窺える。ここでは二經に先立って願成就文が引かれ、続く引文では、他力信心の徳が示されている。『涅槃經』の第一文は、四無量心・大信心・一子地に分けられ、これらはみな仏性であるとするが、親鸞は四無量心の大慈大悲あるいは大喜大捨は凡夫のみで起こすものではなく、あくまでも阿弥陀仏が因位の時に起こすものであると読み取っている。もちろんこの仏性を生む心は仏自身のためのものではなく、一切衆生のためのものであり、このために大慈大悲を得ると領解するのである。大信心についても仏性は如来回向の大信心であるとし、一子地についてもこれを浄土における位としている。このことから、この位を得て一切衆生を平等に

見る心を起こすのであって、一切衆生は必ず浄土に往生してこの一子地の位に入ることができるのである。そして第一文・第二文により信心正因と信不具足によって信心の内容を顯わしていく。それに対して『華嚴經』の文は第一文が代表しているように「信心を歡喜して疑いなきものは、速やかに無上道を成らん」と、証果を得る事実が述べられている。

「化身土巻」信聞釈・勸信經文証の『涅槃經』の第一文・第二文とそれに続く『華嚴經』の文は善知識について述べているのであるが、その相連点は善知識そのものの対象と我々にどのように念じられているかの点である。

このように三ヶ所の連引を見てくると、この三ヶ所ともに誓願一仏乗の開示に繋がっていることが分かる。そこで二經の共通する役割を見ていくと『涅槃經』は往相の必至滅土を顯わし、『華嚴經』は還相の普賢の徳を顯わすものと見ることができのではないだろうか。親鸞は本願力回向の往相還相をもって他力真宗の法門として、これをもって一代仏教を看破している。そう言ったことから考えると『涅槃經』『華嚴經』と連引することによって往相還相という一連の形を取り、行者受得の次第を顯したものと見ることができないのではないだろうか。

〈キーワード〉『涅槃經』、『華嚴經』、連引

(大谷大学大学院)